

〈解答〉

① 1 曾<sub>テ</sub>致<sub>ニ</sub>ス巨象<sub>一</sub> (完答)

2 太祖

3 イ

4 (1) [例] 巨象の重さを量る(ため。)(8字)

(2) A [例] 水面の位置(5字) B 物をはかつて

配点 ① 1、2は各1点、他は各2点 10点満点

〈解説〉

「蒙求」は中国唐代の官僚であった李瀚という人物により著された三卷から成る書物。幼童の教科書として編さんされ、中国の上代から南北朝までの古人の有名な逸話が、暗誦しやすいよう韻を踏んだ短い句によって書かれている。日本に伝わってきたのは平安時代のことで、それ以後、盛んに学ばれ、江戸時代に至るまで多くの注釈本が書かれた。漢文の返り点には、直前の漢字に返って読む場合の「レ点」と、二字以上の漢字を隔てて上に返る場合の「一・二点」がある。今回は、「象」という漢字から二つ上にある「致」という漢字に返っているので、「象」の左下に「一」、「致」の左下に「二」と小さく書き入れる。

2 孫権という人物から巨象を贈られた太祖(曹操)は、その巨象の重さを知りたいと思いい、自分の家臣たちに象の重さを量る方法を尋ねたのである。

3 2の解説にあるように、巨象の重さを量る方法を曹操から尋ねられた家臣たちが、その結果どうしたかが傍線部③で述べられている。傍線部③「理を出だす」の「理」は、「道理」という意味で、「筋道」「方法」「やり方」などと意識して考える。

4 (1) 2、3の解説にあるように、曹操が巨象の重さを知りたいと望んだので、曹沖がその方法を発案し、実際にそのための作業が行われたのである。

(2) 曹沖の会話文の「象を大船の上に置いて、その水痕の至りし所を刻み、物をはかつて以てこれに載すれば(Ⅱ象を大船の上に載せ、その大船の水面の位置に印を付け、象を大船から降ろした後、物を量って同じ大船に載せ、大船に付けた印のところで沈ませれば)」の部分が、巨象の重さを量るための手順である。手順2に「大船の側面に印をつける」とあるが、この部分が本文の「刻み」という表現と対応しているの、その直前にある「水痕の至りし所」を参考にして、Aに入ればよいとわかる。また Bには、象を降ろした後で大船に載せるものが入るので、「物をはかつて」を入れればよいとわかる。

〔大意〕

(中国の三国時代の魏の創建者・曹操の息子である)曹沖は、若くして賢く、体格にすぐれた人物であった。五、六歳の時にはすでに成人に匹敵するほどの知識や知恵をもつ

ていた。ある時、呉の孫権が、巨象を（曹操に）贈ったことがあった。太祖（曹操）は、その巨象の重さを知りたいと望み、その方法を多くの家臣に尋ねたが、誰一人としてその方法を考えつく者はいなかった。（そうした中で）曹沖が言うには、「象を大船の上に載せ、その大船の水面の位置に印を付け、（象を大船から降ろした後、）物を量って同じ大船に載せ（、大船に付けた印のところまで沈ませ）れば、象と大船に載せた物とを比べて（象の重さを）知ることができないではないでしょうか」と（言った）。太祖は（息子がすばらしい提案をしてくれて、自分の望みがかなうことを）大いに喜び、すぐに（その作業を）実施したということであった。